星月夜顯晦録

四編

四

へ遠13
2208
19

門へ遠73
滿2208
巻19

星月夜顕晦録四篇巻之四

目録

○義時非道義盛が拜領の宿地を奪
金窪行近荏柄の宿地より来勤番を追出す図
和田義直馬を馳て朝盛を逐図
○和田朝盛忠孝両全て慮る鎌倉を出奔
和田義盛怒て朝盛入道を折檻の図

宮内兵衛尉公氏義盛が亭へ使を勤図

○相模次郎朝時帰参三浦義村兄弟変心

星月夜顯晦録四編巻之四

義時非道義盛が拝領の宿地を奪

偖も和田義盛此間中の首尾ゆえに。荏柄の宿地拝領の願も。叶聞届の程覚束なく思しに早速御免あり。樹胸を開く。次男新兵衛尉朝盛此趣を見て。父に向ひ。先日の御密意此度の比斗義重く也れば。有れ共結く思慮付て先達て義直義重が罪を免許しぬ。今度又荏柄の宿地即刻に下しぬること。父の也面目一族の悦る所。是君也の諫意に思ひ。故に無ふ泳兼て斗畏と約ひぬ。

尼公頃に濃況也。是頃の。殊に小条の縁家にもしく。君又至孝の也生質ゆえ。母公氏尊敬しぬ。彼を不利義時氏誅せんと

とても。君の心に逆ふ理り成べし。若しかば忠誠の意も。君に達し難うん
う願くは怒を休めひ時の来るを俟めよ。義時いふ推威ふ募るとも。
ふも君を弑し奉る程の義は有まじ。今暫くは扣へて於て。某君ふ眤
近仕度所存を以て密ふ君の耳に達し。其ふ応て斗りめば。忠義全
しとやめるとん。父赤松を察しめひての也企るまでも。他人は是を知らじ。
北条の権を悪む嫉妬の企るうと沙汰いてさば。死後の汚名一門の恥辱
ふいとびや。然は賢慮を煩されいと連々まば義盛黙止汝ず不も又る
論じ然とそ相續さまじ。君の血脈と察しるべし。存命して逆臣に
勝を座んとも口惜し。此企に及といとも。同じ君の也徒に達れは立
世の内ふ逆臣と侍せん事とそ望不るまじ在所の宿地首尾克下めな
ん。皆彼正に授位しに為ば自ふ主と北条の間を決る便とも成べ。然ば

強急ふ侍ふ及まじ。皆く時節を待合べし間。汝能々君の也気色と
伺ひ密に中しを通べ。之とも久ふ朝盛収と限る。所恐と若らるふ
べしとぞ。其ふ不取とも。忠孝全うん為の斗ひこそ殊の正しけと。父子
申合義盛も怒を押へ密謀の志を良敬せしば朝盛も父の遺心を
感悦さまば。いとゆもして君の内意をやうえんめと。所に伺ふ。其
程を伺ふ。北条義時を和田左衛門尉在所の宿地糸領のと式
聞為て己も所存の地るまば。残多ひ即尉ふ尾公の所に参
ふ。和田平を胤長さしも大罪の者と云ば仰仁を以て一命を
助け。流刑に處さらくと。滅に廣大の御恩とらばや。然一族る
三浦の半分を歴て。是を恩と思べに左ふ。義盛古う。一族の
宅地と他人へ譲しとの。頼と巧に君伝威しまり。胤長が宿地を

金窪行近
荏柄の
宿地ゑ来
勤番を
追出す
図

無躰に所望仕の不君渠が祠を悉せるひ早速義盛へ下しありハ罪
人の一族たる義盛閑居仰付らるゝ其宿地を手に入なバ謂あくハ某まゝ
為て彼宿地ハ宿直守護の為に拝領せんと存じ居たる其謀反
人の落着未悉く相済ざる中へ皆々我人死在に義盛遮て願を
達し君を軽じ我を顧ざる是を称ざる時ハ一度の罪なるべしと道を申
さバ彼宿地ハ胤長を生捕たる勲功に依て金窪左衛門行近にこそ
給るべき筈なれ功有者にハ恩賞の沙汰なく罪人の一族たる者へ宿
地を下しあるハ賞罰正しからず君臣和の基ひとも相成べし急ぎ
義君へ仰進せられ宿地を召上られ金窪へ給る様成れ其かなひ然るべく
ゆんと縷想しるまバ尼公むと同じゞあひ早速此旨君へ仕まさま尚愛
罰正しからざる時ハ毛頭有べからバ早く宿地を下るべしと肴乱

君聞し召れ胤長罪名を以て流刑せらる。親族たる義盛たりとも。
何の旨一理あるにあらず殊に母公の仰を受るといへども去ながら一
旦和田へ下し宿地を今更召上ゝん事ハいかゞと思召さる此義ハ追て供
行ひ給ハんとの返答を種々に工夫ある処に義時ふたゝび今金窪行近
胤長を容易生捕せし大功恩賞なさんバ叶まじく在柄の宿地ハ
猪良首懇望仕る処に不詮人の備執なさらん為行近に賜まはらバ
一旦和田へ下されし義故先君返されし其儀に拝領仕る金窪に
讓与なさるべし諸人異論の義はあるまじと申上ければ君にも止事を得
給はず聞届ありて此段は義盛へ申聞代の地を与ふべしと仰ければ
義時ゑつに入て此沙汰有べきやと申て退出し早速行近に
命じ在柄の宿地君より下しあつたる。和田が守護人を追出し宿地を

請取まゐらせ候祥頌の由申さるべく陪臣まづと了知せる故行迫ナルに
はべり即時に数十人の士卒を引具し荏柄の館に振君命に依て此
宿地北条殿祥頌ある故受取に来りしと汝亦早々立退べしと推
拒申さるべく和田義盛郎従久野谷弥次郎是と義盛此館の主人義
盛先比祥頌被さに依て我々勤番を一旦場アリ宿地といへども日
わづに他家にさるべきや不審之とも申で行近怒て義盛賢頌
下さるべし今日改て北条殿祥頌ある示之汝幼ども武勇ハ悪人亂
長ず宿地之義盛其一族さるべき外にそなみ紀多宿地をトさるべき
先日局代以て暫く預置べしの命令代賜ふと雖も違へ
めのるゝ人いづまでもせよ今日義盛附祥頌の上ハ家早北条氏宿地之
退なべき命令を背の罪義盛に如何ぞと申るべし家来に命じ

押入て久野谷弥次郎を捕縛し投牢し理不尽の追立さるべき弥次郎
大に怒り切て捨んと思ひ一旦彼牢を破出し暴動と出
さるべき主人の罪とも申し後人悪さるべし然る主人の為に唯快く
明渡申さん中さるべ。むし主人より預置る所と其後主人ハ秘蔵
共。我身の咎に主人の大事ハ捨難し と忠義を思ひ無念を怨其家
来を引連てどくと立帰り義盛に形と告しに義盛忙然物も言
ざるしば後る卓を砕と擲義時奸賊いるまで斯まで邪道を振
舞ども我堅て此賊を誅べしと大に怒り牙を噛で御所の方を
白眼罵るべ久野谷主人に向ひ一旦此方に陽アるべし十日も経
て後人々さるべき拒申し此義ハ思人に許想あって理に負て祥頌し
の人べしと慰めに義盛唯頭低て暫て欲甚のこと久野谷主て来

彼宿所を預かり。無得に捕縛し帰り。主人の心思慮もみだれ
と存ての侵奪。うち推柄より一度仕よとれ。理非と糺しのうと
勧るに。義盛聞て仕小罪なり。我別に思慮あり。後に及び手伝に
捨置べしと制し止る。怒に押事ら心中に義時誅戮の善策を
立て及ぶ。扨又此度の騒乱策れ張本なる。泉小次郎親平討るの
将ユ藤と対取師と周り行方なしと。他の囚人共も長く討るの趣
后頭なり。罪名の沙汰中も及ぶ。義村叔和田を拒とのこと心して日数を
過し。徒編も見れ抜の斗ひと心なれば。君義村氏と亂長既ま
罪名決し。流刑に處せ。やとれ尋ゆ。心
外さえい柔亂長罪名決定まで。和田が一族共人数の為引籠れ
在れば。彼罪科定まるまで。人馬皆く逗留の処れ。尋に
預り恐入さえ猶評定の上各の禁過を加へたれ者ホ及び
信濃国の住人海野小太郎幸氏に教書を賜り。泉小次郎を
国の住人として。同国の武士を語ひ。猶孫倉の諸士を衛合て謀
反と企ての処。事露夫々召捕るの砌。親平相州建橋ゆて討るの
時を討取退去故の上ハ本国へ帰在べ。搦捕孫倉の琴来べ
と申さ。其後捕亦処の諸士の罪科を君辺ホ評議よ及の処。大
江廣元ナさまとの八亂長脱よ流刑の処。和田の両息思免ゆ上ハ
此度先祖よ就て此沙汰有。兼忠義を励しめ然ば上と有方也
と一度し孫倉の士諸召れ士ともよ恩免と蒙り。五十日が間私宅よ
閑居し。向後不忠不束の斗美なりとて申渡し。由利忠八郎
八過と悔自許よ依く。大事よ及ぶる旨に称美有。向後忠節を励

和田義直
馬と馳て
朝盛を
逐図

爾〻仰渡さるゝ安念法師事ハ中使くして諸士を欺掛ふの罪深き
さいなむ。偽倍文恩赦の旨沙汰を以て土佐国へ配流せらるゝ千無妙
成創が働莫太なるまつて。褒称と家を外村まの面々夫々に称誉
る頼り。時を取ての面目ふこゝる。千渡小糸が斗ひあて和田合戦後の
後和美を賜加恩の地を賜ひ人扶も海野小太郎ハ此教書を賜
ふ伝く。泉小次郎親平を搦ざんとせふ。信義を飯ぞ何国へ逐電
せゝや。近国ゆもこゝ當ざる旨注進ふ及の旨。家郎を外諸国の住人へ
見知次第捕ざとゞ旨綸らるゝ

和田朝盛忠孝両全を慮て縁組と出奔を

却説和田義盛ハ北条義時が邪悪を誅せんとゝふて虎ゝうれ
共彼を付を就て黙止ゝが柄の病地と非道を奪れしハ密

意を尖〻子息郎ホを集用意を及び。不日を変を発せんと。一
族の心を試ゝゆもなゝ〻こて。廻文を以く会集し。和田が亭
ちゝ。夏の由を注ぎゝ。元来粗忠他者ゝ一門怒が堂〻神
文とゝつく約を堅。義盛を相渡〻別心ゝて僧侶と頭〻ゝ。
義盛偽ゝく呼びゝる。然ゝを新会沙射朝盛ハ先日父を諫〻以
浸君を蜜意をゝうとゝひ居〻内右の姿を故存命も寧〻。是
非ゝく父の命を従く一方の将と義々ゝ。兎角君へ対〻ゝ与を攀
ゝの怖ゝ。倩ゝ〻父の意を隨ゝ孝ゝハ立ゝ。君を紂不忠と
ゝう。所ホ義ゝとゝ。父兄を背孝悖を失ゝ不注世と道
出家ゝゝう。君ゝの善提を吊ん夫ゝゝと覚悟ゝ。四月五日早
朝沙所ゝ出。余仏ゝ山職を せんあと。君迎ゝ戻ゝ経ゝ物

語ましいろふ勝まじ伽をやしなふべ君出撥煩廉しく。ゆ盃と下さまし一修自ま都と拝し。父方寂所に帰り。父兄と何くれと暇乞し。書を残さ衣を纏金と立退途中ゆく自ら髪を刺入道して実阿弥陀佛と号し京都をさして登る。父義盛是を知て元来朝盛ハ弓馬ふ達し。智勇衆に秀る。一方の和と頼子共の中に第一とゆひし者なれば斗畧を示べに変有て嘗ふ。朝盛家来共言を立て驚たるべし義盛の方人持参し義盛披露ふ忠孝全うせんと欲す。道世を高殘しけるゆで且愕且怒り。父が一世の大事を只捨ず退く不孝者怠慢迚禁んと。四男和田四郎左衛門義盛を呼く。汗衫早く追拉連帰れ入道しても苦らしべ是非帰らぬ付く捨ると。義盛畏く唯一騎

鞭を揚飛が如く追拉う。翌十七日駿河国に我の沢に追着朝盛に向父の命に依く純孝ハ兄いろるべ大事を捨出家ゆ父方を怒引立帰ると。速に帰ゆとかるべ朝盛入道我全く父兄を捨ふあらぬ。忠孝の立難を欲終に罪を遁んが為之汝我を免して快出家遂させよ。父兄の菩提を吊ば。修羅の苦患も浮うべし。唯我行方の知ざるをとかるべ。出家ハ有まじ今立帰ざるを父の心に背といへども。却て孝の基とるべ。尤形を替立帰んと面目ろとゆで義盛答て父兄に命じ。ゆで程ろれば是非途中に追着べし。用捨ろく引立帰ま若辞退せば斬く幸に萬一人免し帰らば。倶に生て世に勘當ろべしと宣ろ。出家帰ゆべ未又不孝者と成べし是非一度立帰父の怒を憩めと無理に勧る故朝盛止ると

得ぞ然ば一先立帰人と。義直諸共も強食引返し翌十八日義盛の亭に立義直始終を告しらば義盛立出朝盛と云る不剃髪し衣を着し出家得度の姿也義盛怒の眼をむに出し忠孝を思義に依く企る斗畧。一族皆同意の処已一人命を惜出家して身退んとする。不忠不孝の賊云るも中々腹立なりと詈ること朝盛平伏し涙を流しるぐる也怒ハ也もるまでも。未然を以推量有ての也企おゆゑ也非也討死ハ也覚悟ゆゑ也さあるに財ハ忠義の也身に悪名を汚ゆゑの悲さ。後世ハ彼の種おと惜うゆゑ命を存命且ハ父兄の也跡をも吊ん為出家して身を遁ぬかく引返しまるゑ以也ゆゑ隨ひ以前の役を相勤形骨碎身の働をしゆゑ也不及おゆ何卒也念を休らきひとすべしと欺給ひ常盛義秀ホ父を諫諍言

卒ゆゑ義盛漸怒を押徳に罪ハ免さとい人ども一方の扶ゆハ用ぞ我終季に差置べしと定る。扨又横山右馬允へ時日を卜ハさん為用意倶達の日を美へ五月三日早天の事を発さべ也に変定し。子息二郎後人千育ヤ渡に横山が方へもヤ通じる。こゝ不又義盛常に扶持し所の帰依僧ゆる道坊と云有生国伊勢の者也太神宮寺幣祈祷の為也さんと欲まれ他国を悼り表向ハ罪を負せく追放し内分ハ勢ゆゑ帰祈祷の支を斗ふべ也由卜含彼僧を追出ゆゑ道坊年来情を感じ在ば一義ゆも及ぞ昔て義盛ゆ館を出知縁の人多も弥の支にゆゑて義盛ゆ扶持を離れ。古々勢ゆゑ帰国をそ。暇乞し立出る義盛平生諸人を賒家来の扶育厚く情源を推知ぐる者ゆゑ

和田義盛怒て
朝盛入道を
折檻の図

尊道坊ハ帰依僧といひ俗の名はもあくぎょうと追
出すべき格なるに日比より仕形不案内とヤリ者も多うり
是ハ義盛此間中より外義隨分隠密に用意ありべくも。一族ヨリ
郎従も俗多の調達を維ぶる。和田が一族常なるぬ弊と
風聞する折柄也。そもそも坊が支を鈍奇怪世と何とぞ物騒く
義盛支を借士別當なるに三浦九十余人の連署ゆて智勇を双
の老臣子供俗多あって常盛朝盛義秀と始万夫不當の勇剛
たる者一族中土屋義清古郡保忠ゑの豪傑あつく借臣
の中に此さのごとく敵とぞ者ゑ。此人々隠謀ひくぞそもあぶ
由々敷大事ゑりと思致ゑく也自然と間里の伝説く此所彼所に
密使合て危ゑるが。和田ハ追く時日を待に至さく出仕とぞ

謀也諸人頻に怖畏の思とゑり。農民商人東西に奔走一騒
舎中騒ゑりと終に御所中ゑの沙汰ゑるとぞ君ハの外愕せ
ゐひ。借臣を集めハ評議有北条義時我身に吉ゑ凶露知ハ契義
盛君と約ちゆ逆心を挿めゑりんとゑひ折を得ゑりとさぐ徳一義
盛此年来忠臣の栽ゑに暴り。道ゑに成節せ一に先比荏栖手を
が罪の怪ゑとぞゑも栽腔の推威に卑賜んと企せ一ど非乃ゑ形ひ
ゆへハ充ゑりさでも死刑と宥添罪せゑ一ハ抜群の厚恩ハ彼一家
有難と恢ゑに却て已が別の吐ハぬを憤う君と外ゑ人と分ゑ
成べ一是を以く察ゑゑハ義盛泉小次郎と同意我せ一と存せゑ筈と
ハ仏明の上急度制止と加へらまでえバ由々一に大事に及ハんとヤ上ゑ。
君ハ吉義盛平常の忠誠逆意と懐ゑゑハあくぎの若遠敵とゑひ

ゑび本国へ引退寧ろ斗筲と興とゞ不穏舎に在くあらも法人の
世法を以処まよ見ある然争う安座せとまん即時に変と発さる
ろ又も虚説のも沢も法とゞ記善るれぞもそのる然ハ逆心ホあら
ざる而し先年も受領の支と願一世の望又と訴しる共餘人のも年
ともまう四ホ知の為ろまとと記とろひ自ら戸を止て狀状をも下し面員と
乗ても忠節とろふ義盛今も我ら弱ゞ記謂るゝと作る義時主
て君とそ以前とろ忠義の者と宮へり一夜の中ゆ心の変ゞ分
ハ人の習ゆ然ゞて法敵逆者と懐ゆ。ちゞハ隨分忠誠とゝし。
君の為ハ命も捨ゞ記孤ら功労とる。諸人ら感ゞ敬と君又義と
賞美あり。威の付ホ従く。終ホハ君と謀んと仕るゆゝゝ義盛
とも真其ゞ。昔ハ忠義の者ら弁。唯今我身れ推威有ホ

任せ逆心の企有まゞ記ホ。義ハ何とゝく也使者を出ハされ。義
盛ゞ不在ゆ尋みて然ゞ記。彼ゞ鈴の板子を見る馬物別ゆ出
と以く試のべと勅ろゝわぞ君見ら同ゞみひ拝て家内を馬府公氏を
也使者として和田ゞ亭へ出る公氏ゝ食に依く早速れ向来内
久ゞ。義盛君の也仕と仕く。水于立鳥帽子ゆ義ゞ。出迎へる
令と兼る公氏ゞいろく世ゝに風説ゝ知田義盛逆心を懐ゝ君を
引りたゝんと企ろ。抑君へ對ゝ恨を含謂みてゝるゆゝる敬ゝ
ゞ而ゝ若なる子細もあゞ速に訴出べゝ。冥く斗ひ出ゝるべゝるり
義盛ら於て奴初ホも世の動乱を好ごゝにあゝずとい今も風ゆホ依く
止ことを得ゞれ尋ある処ろうと相述る。義盛ハ出に世の風説ら付ハ尋
下ゝるゝゆ記ゝたゝそゝゆん然ゝゞも義盛不忠と存ざるゝ共往ゝるく

処今更中沢仕るふ及ばるるべく候不運の次第一通りやとべ。義盛
拙き身なれども祖父義明が忠義を継治承四年右大将家義経
の先初め後ひ奉りて以来時も忠義を尽或ハ敵の箭先に命を
物政道に心身を労し君の為に滅亡を伸んと欲ふ
幕下君の恩顧又おろかに渋谷を召まべ更用まし君に水魚の
和しるし四海自ら靜謐なるに先考薨去の後いとく
忠義を尽さんこの心腑を悩ませいくぞも其功むなしく君に使を乃
酔とそう。先考薨逝いまだ二十年を経ずして頻に沉淪のなげひ
と嘆く適を条々愁訴に及ぶ注々微音を出すといへども鶴空鴨
水遠ざかり退くべ、運を悔るのみ。然ハ君と怨忠を忘
義を失ふ者あらざる事を逆心を思ひ当らん系が誠心を於ハ

天神地祇天道と君と独知るべき処なり。系が不運々又君の知り給
ふ処の非ざる君ハ独五常の道と共ぬひ。ハ三代の中興勝てまし
ども。好曲侍逸を賢正を虐ひ邪悪諂諛を仁慧を妨る殺さり。
縱令系沉淪ともも大君を対し奉何ぞ使者となべき唯賊臣
なく禍害をなさんとす。是のみ悪正ふ人間能くしてふ
有る因公氏も義盛が祠れんとおひしぶ。予愚を信ハ義盛を
ヤ人なるゆで君左こそあらん。義盛を張ハ逆心あらんやうるのこと
仰なるに義時ハ逸々義盛が返義を忘ふ孔ふ相ゆら者を
然ハ逆心賊臣を謂と何者ぞや然ハ系賊臣を討んとて形の如く偽
装戦合るや若賊臣あらばるべきに偽ハ
基成邪を見さるるち賊臣なるべ逆行ん我身ハ飛を隠ん

偽をかこつて其実を隠さんか何ゆゑ世々の仏法といひ義盛出仕せざるを引合ひ居るとは企ての事なるに仏法を以て事仕出でんとせるを人陸奥をば紀伊守となく城長を悪むるを以前の寸功を述べ君を欺紀都て其を成んと彼れ今一度出使を出す。

城長と雖ども直ちに誅せられ旨伝聞されば忽ち誠と彼れ

うんと勅やるる。尼公ゆゑ此度評義の為当所に来りたる人

をの此度鎌倉と作まつる。因晩来に公氏を再び和田が亭に来る。

公氏義盛に対面し上奉を達し城長の姓名を作てくべ

ナけるば。義盛笑て是君の仰せあるまゝ。宜く義時差出

らんと尋ねなくるる。其為紙やうんとなる所なり。先ゆゑ多。

君が対して不忠をなせば。るべき此条相接る義時といふ

賊臣有て。行跡伊香の相を現じ王莫ぐ権を握る。非道の

沙汰実ども漢家の災遠らざるのみ。素懐を制する人の

処一族若党の士切に奸賊を誅せんを望賊臣が所行に於ては忠

悪ども極るまじ。君のは内縁といひ尼公のは間柄有を以て素法

士を宥めを支と止んと欲するが若少なれ血氣一図に君の為彼賊を

討んと詈。支成ども速に忠死を遂んと彩む。彼ホが河皆ゆゑ道

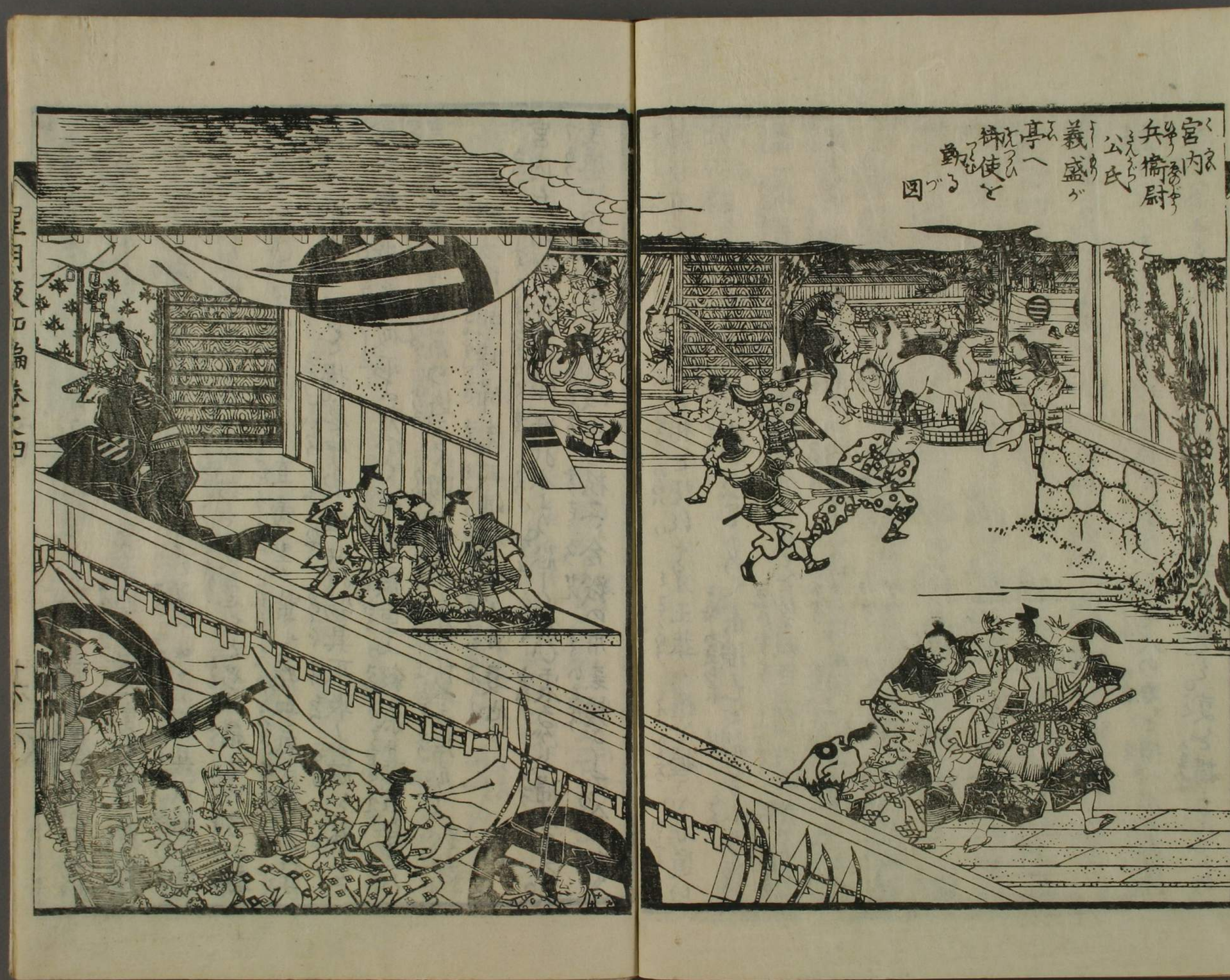
理に合ん素制を知らぬを知らぬ。勅て是を止んとすれば却て出義を

兵ども世に沸の族と呼ぶ。多に有て止ん。況ども若党の所為に

同素仕る処る。更に他心る。若逆心を見ば何ぞ強食に有べく

支をるべ。唯主人の賊臣を戮せんと他人の力を借ばあるべ

又隠密に紀支ゆもゆゑ。ちるべ謀をなん。支を構えんどの


宮内兵衛尉公氏
義盛が亭へ使を遣る図

義更よりまるるの。斯白地よ言よ仕るうふ。賢慮易思召下さるべ
と返答と。公氏ゆうく大ふ驚紀るぞふ。何とぞ紀変もるらまば。其
段中ふと座を立く。中門を出ん。館の中ふハ兵具沈湖（今
も討出べ紀）鉾るりーゞ。公氏扨も支急と思ひ猶も四方ふ眼
を付く伺ひんふ。義秀義直義重が輩と始血氣盛の家ゝ子
郎徒脇を麼巻と握。座中ふ雑兵ゝ物具取敢し。旗を麼さ
鎗を拭ふ鉾。爰彼所よんく。用意厳重よ。殺氣甚盛うまるば。
言句も出ーぐく。亂の迯ぐく頭と抱早々御所へ帰ん

相模次郎朝時帰系三浦義村兄弟変心

宮内兵衛尉公氏已臍病ゝ恐ーく思ひ震るぞふ帰るまば。
義盛が巻と中ふく後鎖の松子合戦の用意頻よ。今ふも

討出人鉾を作ゝ敷ゝ紀ゆよ。君大よ怒り
ひ義盛が巻ふ奇怪之義時よ准（我ホ母子と討んと企。これ
謀反の逆賊と云べ。実よ義時承義あるば。ま統と海（君命に任を
べ紀よ已が意よ頼け。国家の刑罰を紀んこそ。殊よ渠私よ猛勇の輩逆
心相違ふ。偏よ挑権の威を如我を立と賊ふ。ゆく征伐あ
どんば世の患と。ゆ岩ー。然ぞ紀武士命ト。渠ゞ変を発せぞふ内ふ。
殊戮を加ゆべーと宮人時君作ゝ。義盛三浦の棟梁ふて。弦
士の列常よ居と既よ旧ー。殊更日来往人を扶育せー若るるば。憑
ふ命と落さんと欲ふるめ。義かゝ紀ー。子共郎徒皆万夫不当
の勇あり。一族又勇猛ヨヌけるば容易殊戮成ゞくゝ紀ー。猶を
制ぞ紀者鎌倉よ有ぐゝと。憑ふ少をめんく誅ずんとせば。

却て彼が怨を累大変して生ぜんと為ば。もしこれを討るハ老一が子くん。
往て実否を相糺いる根とも斗ひ給ん。猶よまゝ〳〵久ゆで。尼公心
岡の人ども。和田を押る力ろ紀伊人。君の御ひよ確の人。北条義時ろの
京と安大よ敵対。義盛よ逆心の名と同罪よ落さんと思ひ
一ろ。我身をさして逆賊と申由ハ。唯今義盛我館を繋ひ
来る京のやわとんと心ろとぞ夜中よ沛所よ此ます。義盛が孫
反已よ。ふ時の変測ぐ〳〵。沛用心るくてハ。大ろ多
ゆゆりんと。震くゆ。法王を集門々と固さ也。独周章狼唄終夜
睡と克ず。困鶏して在るが如く夜も何の沙汰るく。唯沛所中々
義時後ろ伝く。聊混雑ぐるバ。夜明て術法ろ。義時ハ唯恐
一く心汗るなるバ。我鎧く帰ぶ。先遊く金窪ろ帰ぶ。

創長が旧館を明さ也。已が居所とし。夫ろ尼公の沛所よ出世ろ形の
ごく物猟ぐ。皆逆臣の所為ぐ。不時の災と除為也中よ於て
祈禱を修せらる。諸寺に令て安泰と祈しめバ。逆賊等ろ
発ぶ。明王法天の守護ぐ。災ひあるまゝ〳〵と。我身ろ
ぶ。と。尼公ろ。頻に勧ゆ。尼公心と。君人此旨仰ぶ。
公の心ろ。て。拝ろの祈禱と修せらる。先鶴岳よ於て。大般
若経と讀誦させ。勝長寿院の別當法橋定豪。大威徳明
王の法と修し。小河法中忠快。不動明王の法と修し。定遍僧都。金
剛童子の法と修行あり。其外天文陰陽の司親職。天地災変消
滅ろ祭と行ひ。同く恭敬ろ。天骨地府の祀とる。同く実方。星
辰の祭祀と奉ゆ。各廿八日の早朝ろ。丹祓と抽て勤ろ。義時

心を安さるこゝろぞもいまゞ安房屋敷をとゝ往ぎで我居所用心の為に家子郎従を以て守らせ給ふ先年表向義絶せ給ふ次男相摸次郎朝時勇敢の者なる由なれ共前代往守護と呼ひ〻ぐ呼寄度有ゞ彼に招んとも成ぐて。扨く尼公へ申上る人世に物強く所出所の守護者不い得ども腹心の者なるでバかゝる時共の守護人と命じ難くい。源金四郎左巨述油断まゞ〻ら迄是に就て先遊く義絶せ〻ば愚息朝時を頗勇猛なゆゑ戻返し君の守りに備へ〻ば彼方に斗ひゆうんも父の名ゆえ諸人の唱もいぶと差扣ゆゞ若忍免もあるべく速に呼返しゆゑ是皆君の為にとして。更に伝拈を存ぜざると沒と述給。尼公も元来愛顧あまし朝時ゞ夏迄大に喜びゆひいろ和渠ゆえ腹心の者とこそ思べ此時節そ。さう彼ゞ在所早速尋ぬべ

と宮ひ給ふ。義時義村心易くい先日より源倉御ゆうざると推量ゆゑ兼々朝時ゞ在所を内々ゆゝ吟味ぬさするのさる。遠時後州由井の辺に居ゆゝ帰に義り届い依く唯今わも免次郎呼寄せゆゝんとゆゆ尼公ゆ感みく然く早々戻返さるべし。武将共栽宜く執成ん迚即時に君へ仰進ぜらるゆゆ為に朝時と戻返さるゆゝ有る君吹石渠ゞ葛當ハ此方ゆゝ付ふあゝぞ父の心みく追放せ〻む処に義村心次郎ゆゝ共ゆ有る。依く表向朝時と戻返さるゆ君命と称と披露し。早速飛脚を遣し〻る。元来義村斗ひゆて。後に〻さ〻玉内々音信し。年月を経ゞ戻返さるゆゝ含あるゆ飛脚を以く早速立帰。廿九日夜に入く江間の館に入ゆゝ義ゆ修理亮兼時式部丞居ゆる。

於朝附帰アラ亦不審ノ点ヒ其子細ヲ問ヒ度ビ朝附言テ此度君命ヲ伝ヘ先庭の罪ヲ免許有ベシ。早く援舎ヘ帰系まべしと父の也迚迎速ヲ帰来くれ兄弟何ぞ此れ存ずるやと云ふ。兼附もうくと落涙し。扨ハ父此仏の風況ヲ伝く用心の為汝を呼返さるるなん。銀令天地ヲ挟の網ヲ張四方ヲ数百の力士ヲ置とも何ぞ心の安からざる。日比狂仁恵ヲ施し信義ヲ行ひ給ふ。数千の箭先刀槍の中ゆ囲るとも我ヲ列条あるべしと思ふ。此比世ヲ物騒さも他ヶ出ることなど。皆我家ヲ発ちる処是ヲ静んと父の心一ツヲ有。我ヲ静謐とやらさば。君命ヲ背ぎ乱と求汚道理なるべし。大ヲ欲息し。義盛が兵ヲ悪く亡さんと止るべし。治彼ヲ思ハ朝附も落涙し。何卒静謐の速ヲ図あるべ

申ス。兼附実ヲ聞くまと引連出ル。父義時と宗ヲ語りて
ヤ久ハ。義盛事ヲ発ちるゆ。ヲ大乱み及ひん。四家の為君の
此為と思ふ。父皆く執権の職ヲ離彼が憤ヲ休めべ。義盛
元来不忠の目ヲ有ふ。ヲ猛乱と好んやるる。忽企ヲ翻へ
やさん。我ヲの恥辱ヲ厭ヒ君の此為と思ハ耳ヲ聞るるひ。ヲ
義盛四司受ケの所ヲ止るべ。此ヲ厚
静謐の此賢ヲ為ヲ思ふ。鳳長が病地の支も。最初義盛
拝ケ我ヲ。父又是ヲ受ケ故義盛弥憤怒の思ヲ沈て。
所彼ヲ非あるべ。皆此方の邪ヲ病地も以前のごく和田ヲ譲のひ。
四家の勃乱ヲ静めんと練言ヲ及ぶる義附更ヲ再び返言
ゆも及ぶ。若く変顔色して。座ヲ立君辺ヲ出る兼附もせんと

ちく災必ず近よあらんと。天と作ぐ長歎し。心腑と悩しくる。明まば
五月朔日。和田義盛ハ公氏へ對し。北条と亡さんと企ん旨白地ゑ返答
ヤ〻遅くまば。又も也使来あらんやと相待久までも。何の沙汰もなし
ゆへいかく言に享を発せんと思ひ。ども既ゑ横山右馬允時兼と。
五月三日と以く宮ゑ参れば。約と差ぐ相待んと。唯攻伐の評定
のこゝろ。然るに一族の中三浦平六左衛尉義村。三浦助義澄が
嫡男ゆて。義盛ゑ従ずゆて。別く親き中なる先年義村君の
享ゑ。義盛と内々然居るが。此度の企ゆも一族ゑまば。義盛ゑ合
弊ゑ。紀清ゑも差ゆ居るまでも。心中未変ぜば。左や右案ど
悩しが忽ん之ど。一族の好みと捐れ所なるゑ。和田九郎
左衛門尉胤義と拓ゆ久。棟梁義盛北条と亡さんとの企うま

せ。渠ら君の外戚尼公又兄弟の好みあり。義時と対ん之非君へ
ハ歃對ゑ。我く数代源家の恩と蒙り。就中義澄ハ故幕下
の愛臣と。功労ゆ久ど。當時所領ハ多ゑ安堵ゑ住ゑ。君
恩ゑあるぞと。何ぞ。然ば実ゑ逆意を挟ども。仮ゆも君を歃と。
所ゑ向く箭を飛ん。不忠の所為なるべ。さまでも義盛ゑ今ぐ。本
意を遂し得ば云況も有ぐ。所詮成就し難ん。然ハ義盛いろ
程智斗と。勇士随分彩骨と竭ども。味方ハ一族同心の者のみゑ
して。一人ゑ一人の不見ゑる北条家ハ君と傳なる。法旨悉く所
所方と相ゑるべ。若合戦日数と経ば。国の大勢小勢追々地着
北条方ハ次第ゑ大勢ゑ。味方ハ次第ゑ減失ぜ。小ハ大ゑ敵
まゑ。然ばといば終ゑ味方滅亡せんと。必ず然ば後世ゑ

逆臣の悪名を傳へ。恥辱の死を遂るのミならず。永く三浦の家名
を失んこと。先祖への不孝此上なし。よつて我今心を改め汝方に来らん
と欲するも。是一族の好身を離れ。君恩を忘るの忠心ならずや。忠孝共
全ふして家を立ると不忠不孝の名を得く。家を潰すといづれを
善とせん。殊に一族の好身をすてゝ。大なる不忠となさんハ武士の
取ざる所なり。まして小条とても他人にあらず。泰時ハ我婿なれバ義時
とハあひ親く婿ハ子同然なれバ好身も浅きにあらず。是等の義を
以て義盛との誓旨を破るも。不義とハ云がたからず。兼ての企に加担ぞ
三日の宴なればそれも。注進中の上ハ。今宵の内なるべし。汝らが心底
いかゞやとか尋れバ。胤義ゆかくれむの兄弟とても左のごとし。
義盛に与するハ唯一族の好身ふかく御義を守るによるといへども
今汝方に来て忠孝全くせんに比すべからず。忠なる死し孝に死
し義に死するも武士の習と云べからず。忠を以第一とし。孝を以て次
とし。義ハ又其次とも。然バ忠と孝を取て義を捨まあて早く心を决
まとヤゆへ義村大に歓び。さらバ同道して来べしと即時に兄弟打連
御所に馳参義時に對面しヤ久ハ。一族義盛此比隠謀の企あまて
是偏に平所を悪での不行まなれども其奥義斗がたく。何にもせよ
御所に向て矢を發せんを君に敵對仕道理勿論なれてらに存ら
我く兄弟是まで八一族の好身あるを以て。義盛に合躰せし
誓詞を破し爰に来りて告申し殊更若くハ親き縁者なれども義
盛が一族の好身を離るて共非義なるがゆゑ。明後日ろ事を發まる
其心得有て然るべし。と横山右馬允時兼義盛に一味し横山乃

縁家までを催し初二日の早天ゆゑ李領ゝ出る約束之義盛い此勢に合て義家と囲まる幕府を襲はんと度潤ひと待へる中に義時再び数る兄初ハ横山の輩も一味せしむる弥大支うるべし。先以れ辺一族と雖も忠義を忘ざ汝ら〳〵と神所の志し感じ入て義盛せと傾んと合ると先生て此等る達さとんつく征伐を勧ゆゑ君未ざ此心を変し猶豫る及ぶ義盛已に刃のみく ゝ ふ。いでして防ぐ此辺往欲の虚実を知りのん上ハ宜く方便をゝ〳〵面色土のごく。恐懼まゝと大形るゝぞ只管義村と言敬し斗義の思慮を仮るハ未練る形勢ゝ。

星月夜顯晦録 四編巻之四 終